類型学研究（2005），59–73

与格主語現象管見

—ヒト名詞の二格の用法から—

まつもと　ひろたけ

（1）文の部分として名詞が主語になるばあい、名詞の形態論的なかたちは、日本語だけみても、（というか日本語の主語の表現手段が特殊なのかもしれないが）、さまざまである。そこにはガ格、ノ格、ハダカ格のような格形式以外に、Nハ、Nモ のようにかかり助辞をともなったり、Nダケ、Nバカリ など副助辞をともなったりしたとりたて形式があらわれる。

しかし、このように格ととりたてというふたつのカテゴリーにまたがるばあいをのぞいて、主語を表現する格のかたちだけに問題をかぎっても、言語によって、そのあらわれかたは一様ではない。なかでも能格主語と名格主語の対立は、言語のタイポロジカルなちがいにねざす、格体系にかかわる問題として、無視できない面をもつ。

（2）これらにくらべると、与格主語の問題は、能格－名格（対格）タイプの問題に関連してとりあげられることがあるとしても、全体としてその格のタイプ内部の主語表現のてだてのひとつとみられているようである。しかし、主語表現がふたとおりあって、その一方が主語だけでなく補語表現にもかかわるという点では、名格主語と与格主語とが共存するのと、能格主語と絶対格主語とがならびたつのとのあいだに、格別のちがいはない。ただし、補語といっても、与格だと間接補語で、絶対格だと直接補語だということはあるとしても。

与格主語は、能格タイプをとりだす伝統的な言語類型学において、大区分にかかわらない、やや格したの現象とみられているようにおもわれる。こういうことになる原因のひとつとして、つぎのようなことがかんがえられる。たとえば、名格主語と対立するばあい、与格主語は、名格主語の主語としての中心性、シテ性＝主役性をおかすことはない点で、いわばワキ役である。その点で、与格主語があらわれていても、中心はあいかわらず名格主語だから、与格主語現象は、言語タイプとしては名格（対格）タイプのワクにおさまることになるのではないか。

これに対して、能格主語は、主語の表現手段としては名格主語からみてのふつうの格形をとっていないが、主語の意味＝内容面ではシテとしての名格主語の主語らしいところをうけついでいる。一方、ここでの絶対格は、表現面では名格につながるものの、内容面では、名格（対格）タイプからみてのいいかたになるが、主格と対格にまたがる点で、典型的な主語のかたちとはいえなくなっている。能格主語が主語の中心部にくいこむかたちで問題提起しているとすれば、与格主語は主語の周辺部になみかぜをたたせているということになる。

（３）ロシア語でかかれた児童・生徒むけの一般言語学概説、ただし内容紹介にはオトナがよんでもおもしろい、とのべてはあるが、ヴェ・ア・プルンギャン１９９６『ことばはなぜこんなにいろいろなのか』の名詞の格をあつかった節には、与格主語のことがロシア語の例をひきながら、松本の印象としてはけっこう念いりにのべられている。ロシア語に与格主語現象がみられることを第一として、著者プルンギャンの関心、このみも加味された記述なのだろうが、それでもなお、こどもむけの概説書に与格主語がかおをだすのは、母語話者としての意識や研究者としてのこのみだけでなく、客観的にみて一般言語学的に興味をひく面が、与格主語現象にはあるからだとかんがえてよさそうである。

（４）プルンギャン『ことばは…』はそのなかで、シテ－ウケテ（主体－客体）関係の表現において、アヴァール語、レズギン語、グルジア語など与格のようなウケテ格でシテをあらわす言語があることをのべる。そして、それは、ロシア語で Я боюсь ワタシハ　コワイ．というところを、＊ Мне боюсь ワタシニハ　コワイ．というようなものだが、じっさい、ロシア語もまた、Мне видно ワタシニハ　ミエル／ странно 奇妙ダ／ радостно ヨロコバシイ／ приятно タノシイ．のようにしばしばいうことを指摘し、さらに、Мне ～とも Я ～ともいえるばあいがあれば、前者はいえても後者は疑問であるばあいもあることを例でしめし、ふたつのバリアントが存在するときでさえも、意味はまったく同一ではないことをいう（１１６ページ）。

（５）プルンギャン『ことばは…』の与格主語に関する指摘では、また、その地域的な分布についてふれられている。感覚、知覚構文の与格主語は、カフカス諸語、スラブ諸語だけの特性でなく（スラブ諸語では名格主語とならんでつかわれることも付言されてい

る)、ドイツ語にも Mir ist kalt. のようにみられるが、フランス語、スペイン語、イタリア語ではこのような「非名格」構文はきわめてまれで、英語では実際上まったくあらわれない、とする。まとめは、ヨーロッパでの与格主語の影響力は南部から北部へと、また東部から西部へと減じている、という指摘である（１２１ページ)。

ヨーロッパとかぎっているものの、言語族的にはここではインド・ヨーロッパ語族とカフカス語族があがってきている。与格主語の空間的なひろがりについて、うえの指摘がさらに他地域、他語族へとひろがっていくものなのかどうかたしかめてみたい気がするが、直接その問題の探求にすすむことはやめて、上記の地域とも語族ともつながらない日本語では、与格主語やそれにかかわりそうな現象はどうなっているのか、その一部に関してだが、みておくことにする。

与格主語の問題は、日本語ではニ格の意味・用法としてあらわれる。そのさいも、ニ格のかたちをとる名詞の意味クラスをかんがえたとき、うえにみたロシア語のばあいと同様、日本語でも与格主語現象にまきこまれるのは、ヒト名詞が中心である。そこで、以下ではニ格のヒト名詞のふるまいの一端をながめていく。

（注）空間的なニ格から出発して、敬語的ないろぞめをうけてあらわれる閣下ニハ、先生ニハのようなものなどもふくめたあつかいにしないと、ニ格のヒト名詞の主語的な用法の全体をみわたしたことにならないので、今回は一部をとりあげることになる。

(6) 名詞の格の意味をとりあげようとすると、格という文法的なカテゴリーの特徴から、当然のこととしてでてくる注意点がある。格は名詞と他の単語との文法的（連語論的、構文論的）な関係を文法的な意味としてあらわす。だとすれば、格の意味を記述するときに、名詞の格だけを他の単語＝品詞からきりはなしてあつかうことはできない。以下で問題にするニ格の意味・用法に関しても、ことは同様である。

もっとも、ニ格名詞のかかりさきを別にして、その意味クラスに注目しただけであっても、空間名詞ならありか（存在空間)、ヒト名詞ならあいて、モノ名詞のばあいはくっつくところをあらわすなど、おおよその見当はつく。名詞の意味クラスという語彙的な内容は、格語形の文法的な意味をきめるためにはたらいている。つぎにのべる奄美大島北部方言などは、語彙的な内容が直接、格形式をきめてかかっている例である。

（７）ニ格の用法に関して、日本語の方言のなかには、奄美大島北部方言の格表示のよ

うに、シマナン　アン（シマにある）－サブロンジ　ハナシュン（三郎にはなす）と、ありかとあいてとを区別している例もみられる。標準日本語の二格も、内容面からのなづけをあてがうさい、与格 dative のような一本化がなりたちにくくて、ありか－あいて格 dative-locative のようによばれることがある。

以下でもとりあげるヒト名詞の二格は、ヒトだからあいてのはずだととれば、与格とか与格的という用語をつかってよさそうだが、実はあまりあいて的とはいえないところのある二格のヒト名詞があつかわれることになる。そして、その用法は、ヒト名詞の二格形であるものの、ありか的な二格のほうを出発点としているようにみえる。こういうことがあるため、日本語の格体系にしかあてはまらない表現面からのなづけだが、以下では二格とよんでいくことにする。

（8）ヒト名詞からなるあいての二格は、ナニカ（モノ）ヲ　ダレダレニ　カス、ワタス、ナニカ（コト）ヲ　ダレダレニ　ハナス、シラセルなど、ゆずりあいて、はなしあいてのばあいにふつうにみられるように、動詞でしめされる主体から発した行為＝動作がむけられる、むかっていくあいて＝対象をさししめす。行為＝動作がむかっていく点で、ここにみる動作は動作として動的である。それを動作に方向性があるというとすれば、あいての二格は方向性のある動作によって支配される対象をさししめす。存在動詞アルが動作をさししめさない点で静的だとすれば、それとくみあわさるありかの二格も、静的に存在空間をさししめす。これらをくらべあわせたとき、方向性のさししめしにつきあわされるあいての二格のほうは静的でなくて動的だといえるだろう。

あいての二格は、くみあわさる動詞によって、ダレダレニ　モラウ、ダレダレニ　キクなどのように、ダレダレカラの奪格的な意味になることがある。しかしこれも、方向性がゼロになったのではなく、正反対になっただけのことだから、やはり動的であることにかわりはない。

（9）ヒト名詞が二格のかたちをとっている点ではあいて的な二格とかわらないが、共起する動詞がミエル、キコエル、ワカルのような「中間態」動詞や、デキル、ヨメル、カケルなどの可能動詞だったりすると、うえにのべた方向性が感じられない。この辺の事情は、奥田靖雄「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」にみられる連語論的な分析が説明してくれている。

奥田「に格…」では空間的なありかをしめすむすびつきを「存在のむすびつき」と

して最初におく。つぎの「属性として、部分としてもっている」という意味を実現する「内在のむすびつき」は、「動詞との関係において空間的なありかをしめさず、属性や部分のありかをしめしている。」とのべる。「属性や部分のありか」といういいまわしは、ありかのむすびつきのなかで基本的な、空間的なありかをしめす存在のむすびつきとのつながりをおしだしているといえるが、それでもなお、「空間的なありかをしめさず」という点が指摘されていることに注意したい。こうして奥田「に格…」では、内在のむすびつきが存在のむすびつきから区別される。

（注）奥田「に格…」によれば、に格の名詞と動詞とのくみあわせのなかで「歴史的な出発点」をなすものとして、ありか、ゆくさき、くっつきのむすびつきをあげ、本文でこの順に記述をすすめている。あいてのむすびつきはこれらのあとにでてくる。

(10) もっとも、奥田「に格…」の内在のむすびつきのかざりになるニ格の具体名詞、抽象名詞をみると、「雲にかがやきがある」や「この現象に現代固有の特徴がある」のような例とともに、「藤子さんにはいきていける能力がある。」のようなヒト名詞も、空間的なニュアンスをもたないという点で、区別されないままあがっている。これは、もっとヒト名詞があらわれやすい、つぎにみる「能力（可能性）の所有者」のところも、内在のむすびつきのなかでふれているあつかいからみれば、当然のまとめかたといえる。

(11) しかし、内在のむすびつきのニ格にあらわれる名詞がモノ名詞からヒト名詞になると、空間的なありかから出発して属性や部分のありかにうけつがれた「ありか」性はさらにうすれてきて、属性や部分のありかというより属性や部分のもちぬしといっていい段階になる。奥田「に格…」ではこのことが、内在のむすびつきの下位にまとまる「可能相の動詞とに格の名詞のくみあわせ」のところで、用語のうえであきらかになる。そこには「この種の単語のくみあわせでは、に格の名詞は能力（可能性）の所有者をしめしている」とあって、このくみあわせが空間的な性格から、さらにありか的な意味からとおくなっていることがしめされている。

奥田「に格…」にあがっている例文のなかに、「藤子にはわかっている」、「彼女に全部きこえる」、「おまえにはまだよめない」など、ニ格にヒト名詞がくるもののほかに、「ぼくの目には先生の絽の羽織の紋がみえていたのである。」という、人体部分をしめす名詞がニ格にたつ例がある。この例だと、純粋のヒト名詞がきたときより「所有者」と

いう性格がうすれて、内在のむすびつきのなかに位置づけられる面がとらえやすくなるようだ。

(12) これに対して、小論では、はじめから、ヒト名詞をとりたてて問題にしていることもあって、ヒト名詞を他の非空間的な名詞クラスと一括するいきかたにはならない。とりわけ、可能動詞文や中間態構文をとりだしたときは、奥田「に格…」のような連語論的なあつかいで、内在のむすびつきのなかにヒト名詞を中心とした一群がつつましく座をしめるのとは、おのずからことなってくるはずである。

ここでは奥田「に格…」の記述にまなんだ結果、中間態構文や可能動詞文を中心とするくみたてにあらわれる二格のヒト名詞が、さきにみたあいて的な二格ではなくて、存在文に発したありか的な二格の延長上にあることが確認されたので、以下では形容詞文のばあいへとはなしをすすめる。

(13) 形容詞は動作をあらわさないから、形容詞をかかりさきとする二格の名詞では、さきにみたような方向性は問題にならないようにみえる。しかし、ヒトニ　ナサケブカイ、親切ナなど、あいて的な二格の名詞が態度的な形容詞とくみあわさるものは、形容詞のさししめす態度は、一定の動作のかたちをとってソトにあらわれるものであることから、また、態度というのは、ココロのはたらきがソトにあらわれる結果、あいてに対して積極的にむけられるものであることからも、方向性と無縁ではない。このことは、ナイ、オオイ、スクナイなどの存在形容詞とくみあわさるドコドコニ、ダレダレニとくらべてみればよくわかる。

(注) 以下、二格名詞と形容詞の関係をめぐってはまつもと「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ」がある。これは連語論の実践をこころみた論文なので、今回の小論とかさならないが、材料になるような例文がのっているほか、二格のヒト名詞と形容詞の連語論的なむすびつきの分類も、多少参考になるとおもう。

(14)「おばあさんの死は太郎にはつらかった。」や「このみそしるはぼくにはおいしい。」などの二格（ふつうに文中にでてくるかたちでいえば、文例のようにとりたてのついた～ニハ）も、ヒト名詞ではあるが、ヒトニ親切ダなどの二格名詞とちがって、方向性があるとはいえない。動詞との関係のところでみた非あいて的な二格への経過をかんがえれば、形容詞とくみあわさる二格のヒト名詞も、あいて的でないものはありか的な二格

から展開してきたものとみられる。三上章「象ハ鼻ガ長イ」にみられるように、形容詞述語文のあらわすコトガラを「私ニヘビガコワクアルコト」のようにしてとりだすと、動詞アルと共起するありか的なニ格が自然にでてくるのも、なにやらもっともらしい。

（注）はじめの文例はふたつとも『にっぽんご４の上』のもの。

(15) 形容詞の意味は状態、性質（特徴）のふたつの面にまたがっている。おなじひとつの形容詞でもこの両面をみせることがある。ミソシルハオイシイといえばミソシルの特徴をのべている。しかし、さきにみた例文のように、「このみそしるはぼくにはおいしい。」だと、すべてのみそしるを念頭においてその特徴をのべているのでなく、時間にしばられてあらわれた個別的なみそしるの状態をのべている。「死はつらい。」と「…太郎にはつらかった。」をくらべたときも同様である。ツラカッタのような過去形は、時間にしばられたデキゴトをあらわすことになっていて、コンスタントな特徴、性質をしめすことからはなれている。ボクニハ、太郎ニハの名詞部分も、形容詞述語のしめす状態が、ひろく一般になりたつものでなくて、限定的にあらわれるものであることを明示している。こうして、(14) にあげた文例では、感覚形容詞、感情形容詞としての主観的な側面は、コンスタントな特徴でなく、一時的な状態をのべるのに役だっている。この種の意味的な内容にもられた主観的な側面は、オイシイとかツライとかの形容詞現在形のみの述語形式では、(16) にあげる形式にくらべて、ストレートに表現面にあらわれているとはいえない。しかし、形容詞のほうには客観的な側面の表現だけをあずけて、主観的な側面をそれとして表現面におしだすいいまわしもかんがえることができる。

(16) ここに、オモウ、感ジルのような動詞が、形容詞とくみあわさった、コイシクオモウ、残念ニオモウ、ウレシク感ジルのようなくみあわせがある。奥田靖雄「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」に指摘されているが、形容詞部分はうえにあげた連用形のほか、ウレシイト感ジル、残念（ダ）ト　オモウ、残念ナモノニオモウなどいくつかのバリエーションがある。この種の内容規定的にはたらく形容詞と、オモウ、感ジルのような「抽象度のたかい動詞」（奥田「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」の用語）とのくみあわせは、文のレベルでみれば、中心語は形容詞のほうで、形容詞＋動詞があわせ述語としてはたらいているとかんがえることが可能である。　このようなあわせ述語をもつ文にあらわれる、名詞からなる文の部分のかたちは、あわせ述語の動詞部分オモウ、感ジルのボイス的な性格に規定されて、「梨花はなな子をかわゆくおも

う。」とか「…沼田は雪子をますますうつくしいと感じるようになった。」のように、能動形式をとる。

（注）以上２例は奥田「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」から。

(17) この種の能動形式に対応する、つぎのようなかたちの文がある。あわせ述語の中心語が形容詞なのはうえとおなじで、動詞部分がオモワレル、感ジラレルのようなうけみ形やオモエル、ミエルのような可能（自発）形になっている。

・その点が私には惜しいと思われるのであります。（柳田国男）
・しかし、志乃女にはその酸味のある堪えがたいはずの臭気も、親しいものに思われた。（円地文子）
・十年余もつれそった嫁を信用できなかったそなたの方が、わたくしには不思議に思えますよ。（藤沢周平）
・津田には、この返事が少し意外に思えた。（夏目漱石）
・銀子にはこの親子の感情は不可解に思えた。（徳田秋声）
・…この多摩の山は私には一番美しく感じられた。（西脇順三郎）
・…これが定基には前世因縁というものであったかすばらしく美しいかわゆいものにみえて…（幸田露伴）
・それで僕のような者にはすべてがうるおいなくみえる。（柳宗悦）

（注）奥田「に格…」、「を格…」や鈴木『日本語文法・形態論』に文例があがっているばあいはそれを借用したが、ここはそれらにはでてこないので、あらためて例文をあげておく。

(18) うえにみた両種の構文のあいだに修正関係がなりたつことは、前者の例「梨花はなな子をかわゆくおもう。」を「梨花にはなな子がかわゆくおもわれる（おもえる）。」に、後者の例「津田にはこの返事が少し意外に思えた。」を「津田はこの返事を少し意外に思った。」に変換できることからもあきらかである。なお、形容詞が感情、感覚をしめすもの以外でも、その主観性にうらうちされるとオモエルなどの動詞部分が付加されるだろう。

(19) ところで、形容詞とオモウ、オモエル類の動詞のくみあわさったあわせ述語には、中心語が形容詞であることから、付加部分の動詞をとりはらって、形容詞一本にしぼったひとえ述語化が生じる。(これは対応する文のあいだにみられる修正関係を便宜的にこうのべただけであって、歴史的にみての、形容詞だけのひとえ述語と形容詞＋動詞のあわせ述語との前後関係は、それとして確認しなくてはならない。) このとき、あわせ述語のさいにみられたボイス的な特徴は、ボイス性をになう動詞部分がとりはらわれたのだから当然だが、述語の表現面にはあらわれない。

そして、文のくみたてからみれば、あわせ述語にオモウ系をふくむ能動形式の文も、オモワレル、オモエル系をふくむ受動形式の文も、ともにおなじ形容詞述語からくみたてることができる。さきの例でいえばつぎのようになる。

・梨花は　なな子が　かわゆい。
・梨花には　なな子が　かわゆい。
・津田は　この返事が　少し　意外だった。
・津田には　この返事が　少し　意外だった。

この二種類の形容詞文をみると、形容詞自体は表現面でボイスをしめしなどしていないが、形容詞文自体にはボイス性 залоговость が一部およんでいることがわかる。

(20) ここでボイス、ボイス性といっても、オモワレル、感ジラレルなどの表現面に関してだけあてはまることであって、内容面からは、能動と対立する受動をさすのではなく、いわゆる「自発」の意味があらわされている。奥田「に格…」の内在のむすびつきのところにあがっている、可能動詞やデキル、ミエル、キコエル、ワカルなど、能力(可能性) のもちぬしをしめすニ格名詞をとるグループに、オモワレル、オモエル、感ジラレルなどもくわわるだろう。つまり、これらの自発をあらわすばあいも、ココロに自然に生ずる感情のもちぬしをしめすニ格名詞をとっていて、ありか的なニ格へとつながっていく。

文のレベルでなく、単なる連語のレベルだと、「津田にはこの返事が意外に思えた。」でも、「この返事は津田に (は) 意外に思えた。」でも、その津田ニ、津田ニハは意味的にもちぬしとしておなじあつかいになるだろう。しかし、文のなかでも、これらはおなじ文の部分だということでいいだろうか。

(21) おなじことは形容詞述語文にもでてくる。うえにみたボイス性の点から、ふたつのタイプをみていかなくてはならない。能動－受動の対立をつくりようのない形容詞述語文の「ｘハｙガ形容詞述語」タイプと「ｙハｘニハ形容詞述語」タイプとのあいだには、語順に関してだけでもいくつかの中間的な構文がみられるようである。それに、～ハ、～ガのつかいわけがからむと、後者のタイプのｘニハは、「与格主語」とよべそうなものから、与格補語（つまり間接補語）的なところにとどまっているとしたほうがいいものまで、さまざまであるのではないか。　その点で、さきに引用した『にっぽんご４の上』の「この　みそしるは　ぼくには　おいしい。」や「おばあさんの　死は　太郎には　つらかった。」のようなタイプは、語順からみても、与格主語的なニ格から一番とおいところにあるといっていい。（さらに、「おばあさんの死は　太郎に　つらかった。」までいくと例がきわめてすくなくなる。あったとしても、意味が太郎ニ対シテ残酷ダッタのように変質して、むすびつきがかわってきている可能性がある。）

（注）まつもと「に格の名詞と…」にあげた文例を参照。太郎ニツラカッタにあたるものとしては、

・多計代の目のなかにくるしさとなげきのないのが、伸子にせつなかった。
（宮本百合子）

がある。また、つぎの例の～ニは、一文だけでは態度の対象かと誤解されそうなものである。

・伸子は二、三日佃のところにもどった。にげたようにしたまま離別することは伸子にこころぐるしかった。（同上）

一方、「ぼくには　この　みそしるが　おいしい。」という語順、およびハ、ガの使用であらわれると、「ぼくは　この　みそしるが　おいしい。」とのちかさがましてきて、うえの例文よりはるかに与格主語らしさを感じとりやすい。「ぼくには」のハも、ここでは、制限・限定的というより、「ぼくは」の題目性にかぎりなくちかづいていくかのようである。形容詞述語によってボイス対立が中立化したせいだろうが、この種の問題は文のくみたてをあつかうなかで解決していく必要がある。

こうみてくると、『にっぽんご４の上』で対象語（補語）の例として、さきにあげた「この　みそしるは　ぼくには　おいしい。」を採用したのは、ハ、ガのつかいかたからも、語順からも、その結果あらわれた制限的な意味の点からも、補語としてふみとどまれる一線をまもった好判断といえそうである。

(22) 使役動詞とくみあわさるニ格名詞は、太郎ガ　二郎ニ　テガミヲ　カカセタ　というとき、二郎ガテガミヲカイタことをふくんでいるから、もとの動詞のあらわす動作のシテをさししめすという点では、主語的である。しかし、使役文では、二郎の能動主体としてのシテ性は、「そそのかし手」(高橋ほか『日本語の文法』) の太郎の存在によって、言語外の現実のレベルで、すでに一定程度低減している。太郎の強制があるときは二郎のシテ性はよわまるし、強制がよわいときは、真正のシテ的な性格がある程度確保されるというようなちがいはあるにしても。これを無理に与格主語とよんだとしても、シテ性のよわまりがみられるという、主語らしい主語とちがうところが表面化する。動詞文にあらわれる主語的なニ格のこの性格は、使役動詞とのくみあわせ以外のところでも、一般的である。シテ文 (行為文) のガ格がニ格に修正された構文になると、シテの格さげがおこる。この格さげは、直格が斜格へと転じる、ガ格からニ格への表現面の変換についてもいえるし、使役文でみたように内容面に関してもあてはまる。

それが、うえにあげた形容詞文にあっては、動作がさししめされないため、動作のシテがあらわれない。ボクニハ　コノ　ミソシルガ　オイシイ．でもシテはしめされない。このボクニハが与格主語的だとしても、ボクハからボクニハへの修正には、シテ性の格さげ現象は別段生じていないとかんがえられる。もっとも、動作にもシテにも無関心な形容詞文で、シテ性の格さげが問題にならないのはあたりまえだろう。

(23) 能動文と受動文の対立のモデルを考えるなら、たとえば、リョウシガ (シカヲ) コロシタでもリョウシニコロサレタでも、構文＝意味的なシテ性は、リョウシガのほうがつよくて、リョウシニのほうがよわいとはいえない。この点で使役文のニ格のばあいとちがう。しかし、構文＝意味的な (内容面での) シテの表現手段がガ格からニ格にかわったことは、構文＝機能的なレベルでの主語から補語への変更をもたらしている。補語化もニ格化による主語の格さげである。ただし、ここでは、格さげが意味のレベルから機能のレベルへとうつっているといえるだろう。名詞のニ格とガ格の意味・用法をみると、それぞれに意味・用法の中心と周辺をもつ。なかでヒト名詞をかたちづけるときは、ガ格がシテ性を中心的な意味としているとすれば、ニ格は非シテ的なあいて性を中心としているようにみえる。

しかし、ガ格とニ格のかかわりを能動－受動の対立のなかにおくと、うえにみたように、意味は同一で、ハタラキの点で分化しているといえるような状況がなりたっているのがわかる。ここでは主語から間接補語への格さげが、みかけ上はシテ的なガ格からあ

いて的なニ格への修正という、旧来の意味的な変更パターンをとおして実現している。こうして、受動文のばあいは、そこにあらわれるニ格が、ありか的なニ格かそうでないかと問題にすることが、あまり意味をなさなくなっている。

(24) 一方、可能構文をみると、ヒト名詞のニ格形とガ格形の別種のかかわりがみられる。高橋ほか『日本語の文法』に可能構文のみっつのタイプがあがっているが、それは

・ハナには　英語が　はなされる。
・まさ子は　英語が　はなせる。
・まゆみは　英語を　はなせる。

である。これは～ニ～ガ…サレルといううけみ構文と同形の可能構文から、～ガ～ヲ…スルという能動構文と同形の可能文へのうつりかわりをしめそうとするものである。中間態動詞ワカルなども、デキルをふくめた可能動詞とおなじ変化をたどっているとおもわれる。

この点に関しては、存在動詞アルのでてくる存在文は、うえの可能、中間態動詞文とくらべて変化がおそい。～ニ（ハ）～ガアルを出発点として、～ハ～ガアルまではきているが、存在動詞の所有動詞化、つまりアルの他動詞化を格支配のうえでもあらわしたといえる～ハ～ヲアルまではすすんでいない。「まゆみは英語をはなせる。」が実現している可能文にくらべて、おくれがめだっている。

奥田「に格…」にのべられていたように、存在のむすびつきはに格名詞の用法の「歴史的な出発点」のひとつをなしている。可能文、中間態構文にあらわれるニ格の用法がそこから派生してきたものであることから、出発点の文構造はがんこでかわりにくいのに対して、派生さきは、出発点の構文タイプにそれほど忠実ではなく、別のタイプにかわりやすい、ということもいえそうである。内容面からみると、能力（可能性）の所有者、とくに能力の所有者という意味あいからは、もはやそれほど「存在」に義理だてしなくてはならないほどの近縁性が感じられなくなっているのだろう。

(25) さきにみた、同一の感情形容詞や感覚形容詞からなるふたつのタイプの形容詞文にあらわれる、相関的なふたつのヒト名詞の語形、ボクハ　コノ　ミソシルガ　オイシイ．とボクニハ　コノ　ミソシルガ　オイシイ．の～ハと～ニハの関係は、また別のようである。他の箇所で意味的に対立したり、意味的には対立しなくて、になう機能で

対立したりしていたのが、ここではその種の対立がうすれて、ぼやけていく方向へとすすんでいるようにおもえる。結果として、ヒト名詞のニ格とガ格が意味的に分化しないことになっている。これによって、ニ格でもガ格でもない別の意味があらわれでたのではないし、ガ格の本来の意味のほうへと統一されたわけでもない。どちらかといえば、逆に、形容詞述語文という非シテ的なタイプのなかでガ格の意味のほうが中心からそれてきて、「与格主語」的なニ格とかさなる面が生じているということになるのだろう。

形容詞文では、形容詞文であるせいで、一方の格のしるしのかくれた～ハに、～ニハが対立する構図になっている。表現面ではとりたてのからむ対立という innovation が成立しているようだが、内容面で～ニハを与格主語とみることができるとすれば、～ニハという非シテ主語と、出発点はシテ主語だった～ガからさまがわりした～ハとが対立しながら統一している。意味的な対立がうすれてきていても、ここにみられる～ハ主語と～ニハ主語の対立は、動詞文の～ガ主語と～ニハ主語の対立、さらにさかのぼって、名格主語と与格主語の対立を、中心からはいく分ずれた地点でもう一度くりかえしてみせているのかもしれない。

(26) 小論では形容詞述語文における～ハ主語、～ガ主語に対して、ヒト名詞からなる～ニハ形も、主語とみとめられる側面をもつのではないかという、ふたつの形式の統一面をのべることに重点をおいている。しかし、形容詞文だと動詞文のばあいよりも～ハ主語と～ニハ主語のちがいがみえなくなるといっても、それはそれぞれの周辺に生じた現象である。周辺には、中心からはなれようとする遠心力だけでなく、中心とのかかわりをつなぎとめておこうという求心力もはたらいているのではないか。こうかんがえると、～ハ、～ニハのふたつのかたちが、意味からニュアンスにわたる内容面で、まったく同一になるはずはない。

たとえば、不満ダを述語とする形容詞文だと、ボクハ　ソレニ　不満ダ．のように、対象へとむけられる主体の態度の方向性がきわだつ、態度の対象のニ格をとる構文もみられるせいもあってか、

・ボクハ　ソレガ　不満ダ。
・ボクニハ　ソレガ　不満ダ。

をくらべたとき、ボクハ～のほうが不満な態度を積極的に表明していて、ボクニハのほうは態度のさしだしかたがやや消極的であるような感じがしないでもない。この種

の意味、ニュアンスの問題に関しては、とりあげた形容詞項目ごとに点検しなくてはならないばあいがでてきそうだ。(文例はまつもと「に格の名詞と…」でつかったもの。)

(27) ここで、まとめがわりに、日本語のヒト名詞のニ格の用法を、与格現象や与格の一般的な用法との関連でみわたしておきたい。そのさいめだつのは、うけみ構文のシテ補語のかたちづけが、与格であらわれて、今回とりあげた与格主語の問題と直接かかわっていることである。ここでは、うけみ構文のシテ補語と与格補語とが同形であることの原因を説明する必要がある。うけみ構文のシテ補語とみえるものが、出発点としては、名格主語文に対立する与格主語文の与格主語である、つまり、日本語のうけみ構文は与格主語文からわかれてできたということが解明されるとしたら、与格主語の問題が日本語でもこれまでよりおもみをましてきそうにおもわれる。

はたらきかけ－うけみの動詞対立において、うけみ形式がしるしづけをうけていれば、動詞のかたちのつくりでの派生の方向が、はたらきかけ→うけみであることがかんがえられる。そのさい、うけみ文にあらわれるシテ補語も、旧来の格のメンバーでないほうが、つりあいの点でぐあいがいい。しかし、この点にかぎっても、日本語のシテ補語にでてくるニ格は、特に新いりの格形式だなどとはいえない。ハダカ格にはまけるとしても、ふるくからの格メンバーであろう。はたらきかけ－うけみのボイス対立の確立をみきわめるには、シテ補語の表現面の与格ばなれ現象の成立と原因を調査することが必要なようである。

(28) 亀井孝ほか『言語学大辞典』には与格構文の項目があって、与格主語現象をとりあげている。他の項目と比較して、日本語の事実にもいいおよぼうとしている点を長所とするが、例示の中心はグルジア語の与格構文である。その末尾に、

> …与格構文の本当の姿は間接目的語の表現全体にわたって細かに調べてみないと浮かび上がってこない。まだまだ、研究を要する多くの問題が残されている。

と記されていることは、単にグルジア語だけでなく、というより、グルジア語のばあい以上に、日本語の与格主語、与格構文にかかわる現象のあつかいにあてはまりそうである。

[参考文献]

奥田靖雄　1960「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」(言語学研究会編 1983『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房に)

1962「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」(同上)

1967～72「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」(同上)

亀井孝・河野六郎・千野栄一編 1996『言語学大辞典　第6巻　術語編』三省堂

鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』むぎ書房

高橋太郎ほか 2005『日本語の文法』ひつじ書房

まつもと　ひろたけ 1979「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ－連語の記述とその周辺－」(言語学研究会編 1979『言語の研究』むぎ書房に)

三上章 1975「象ハ鼻ガ長イ」(1975『三上章論文集』くろしお出版に)

明星学園国語部 1968『にっぽんご4の上』むぎ書房

山口巖 2005『ロシア文法の周辺　一般言語学への招待』日本古代ロシア研究会

Плунгян. Б. А. 1996 《Почему языки такие разные?》 Русские словари. Москва.